

第2次健康ふちゅう21の評価と第3次計画に向けた方向性（一例）

基本方針3 健康管理を実践する

具体的取組 ライフステージに応じて定期的に健(検)診を受診する【重点】

（1）これまでの取組

- 乳幼児や学齢期の子どもについては、乳幼児健診や学校保健法に基づく健診の受診率をみると、100%に極めて近くなっており、ほとんどの子どもに対して健診の受診機会を提供することができている。
- 令和元年度における特定健康診査受診率は53.0%、後期高齢者医療健康診査受診率は66.9%であり、東京都市部の中では高水準となっている。
- 令和元年度におけるがん検診の受診率をみると、胃がんが4.7%、肺がんが2.1%、大腸がんが8.7%、乳がんが27.8%、子宮頸がんが18.1%となっており、国の目標値（50%）と比べると低い水準となっている。受診場所の拡充や複数のがん検診を同日に受診できる「セット検診」の開始など、受診しやすい環境を整備することが重要である。
- 歯科健診については、18歳以上の市民を対象とする成人歯科健康診査を実施しており、若年期・成人期・高齢期の各ライフステージに合わせた内容となっている。毎年9千人程度が受診していることから、広く市民に周知できている。

（2）アンケート調査結果または関連統計データからわかること

- 定期的な健康診査や各種がん検診の受診率をみると、若年期は、中年期と高齢期に比べて1割以上低い傾向が認められた。
- 経年変化をみると、若年期は増加傾向、中年期は変化なし、高齢期は減少傾向と世代により異なる傾向が認められた。
- 受診しない理由をみると、若年期と中年期は「忙しい・時間が合わない」、高齢期は「医療機関で治療中」という回答が多く認められた。また、若年期は「費用がかかる」、高齢期は「必要と思わない」という回答も次いで多く認められた。

（3）評価のまとめと今後の課題

- ライフステージ別に健診の受診状況をみると、子どもと中年期、高齢期は前向きな傾向が認められており、継続的な取組が重要である。
- がん検診の受診率は、がんの種類によっては国の目標と比べると大幅に低いものもあり、受診率を高める取組が必要である。

基本方針4 ソーシャルキャピタルを醸成する**具体的取組 地域のつながりを強化する【重点】****(1) これまでの取組**

- 自分自身や身近な家族、友人、府中市民全体に向けて健康のために活動してくれる人を「元気いっぱいサポーター」と称し、登録者数を増やしている。令和元年度には1,400人を超えた。
- 元気いっぱいサポーターが養成講座を受講すると、リーダーとして活動することができ、市と協働でウォーキングマップの改訂や、市の事業の運営サポートを行っている。
- その他、市と協働で健康事業を実施する3つの市民団体への支援を行った。
- 市内には、各部署で養成している市民団体や、自発的に生まれた様々な活動団体があるが、今のところ単体での活動に留まっており、今後、団体同士の連携を図りたい。

(2) アンケート調査結果または関連統計データからわかること

- 友人や近所の人、別居家族、親戚との関わりの頻度から導き出した社会的孤立に該当する人の割合をみると、中年期、若年期、高齢期の順に高くなっている。
- 地域の絆や信頼感を示す指標であるソーシャル・キャピタルの得点をみると、高齢期、中年期、若年期と年齢が下がるにつれて得点が低くなっている。経年変化をみると、いずれの世代においても大きな変化は認められなかった。

(3) 評価のまとめと今後の課題

- 元気いっぱいサポーターの登録者数の拡大に加えて、活動内容の幅も広がりを見せている。今後、登録者数を増やすとともに、連携しながらできる取組を模索していくことで、市と市民が連携して健康づくりを進める機会につながる。
- 世代ごとに分解して地域とのつながり度合いをみると、ばらつきのある傾向が認められた。市と市内の活動団体、また団体間の連携を深め、世代による偏りのない地域のつながりをつくることで、市民がより一層健康づくりに向けた取組を実践しやすい基盤を整えていくこととする。